

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



カフェを通じて、生きいきとした高校生のエネルギーがまちを一層元気に (ZOO Café)

特集

高校生の 地域デビュー

- 高校生カフェはまちの元気の源 ③
ZOO Café (岩手県山田町)
- 福島のいまを伝え、未来をつくる高校生編集部 ⑤
ふくしま食べる通信 (福島県)

☆ 専門家に聞く地域づくりのヒント
(福岡大学 人文学部 教育・臨床心理学科 准教授 添田 祥史さん)

インタビューあの人に会いたい⑩
いわき・まごころ双葉会 事務局長 大橋 庸一さん (福島県双葉町) ⑦

東北の元気⑧

新春草駄天競走 (岩手県釜石市)

東北の元気⑨

牡鹿の学びを考える会 (宮城県石巻市)

S(支え合い)-1 グランプリ 第4回いがす大賞 結果発表 ⑩

S(支え合い)-1 グランプリ 第4回いがす大賞 大賞受賞 ⑪
ちびぞうくらぶ (宮城県岩沼市)

被災者支援から、日常の地域支援の担い手へ ⑫

宮城県被災者支援従事者研修の6年間を振り返る

平成・向こう三軒両隣事情⑭

ご近所福祉クリエイション主宰 近所福祉クリエイター 酒井 保さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

場の力⑯

新町茶話会サロン (宮城県川崎町)

特集

高校生の 地域デビュー

今回の特集は、

高校生が自分たちの力で作りあげてきた活動をご紹介します。

学校から飛び出して、

広く地域に働きかける活動を始めた高校生たち。

周囲の協力を得ながらも

地域のために自分たちで考えて、動く。

そうした経験は高校生たちの

自信と成長につながっています。

そして、カフェの運営や情報誌の発行といった

高校生による活動は地域に活力を与えてきました。

これからも先輩から後輩へと

その想いは脈々と受け継がれていくことでしょう。



カフェの運営スタッフ。上段左から、湊白和さん、坂本未来さん、高村侑奈さん。下段中央から右へ佐々木麗緒さん、上沢りえさん

高校生カフェはまちの元気の源

◎ ZOO Café (岩手県山田町)

ポイント

- カフェによって、さまざまな人たちへの感謝の気持ちをかたちに
- 地域内外の交流がますます盛んに



まちの人と笑顔でふれあう

「いらっしやいませ！」
「アイスクリーム1つお願いします！」
「1番さんにカフェラテをお願いします！」
子どもや大人がくつろぎ、お茶やスイーツを味わうなか、調理や接客をする高校生の元気な声飛び交う、岩手県山田町の喫茶店「ZOO Café」。地元の高校2年生の女子6人が、それぞれのテーマカラーの帽子をかぶり、お手製のお揃いエプロンを着て、町内外から集まるお客を迎え入れる。毎月1〜2回、土曜日の14時〜18時に開かれている同カフェは、東日本大震災で被災した自分らを支えてくれた人たちへの恩返しとして、2016年7月にオープンした。

誰もが楽しめるカフェ

同カフェには、ホットコーヒー（100円）やカフェラテ（150円）などのドリンクのほか、アイスクリーム（100円）や特製「ZOOトースト（100円）」などの軽食が用意されている。高校生や幼い子どもたちでもお腹いっぱい食べられるようにと、一般的なカフェよりも安価だ。

焼きたてのトーストや、挽きたて、煎れたてのコーヒーが香る店内は、お客のにぎやかな声も絶えない。カフェの前が散歩コースだという男性は、働く高校生に感心しながら店内で「息。月に1回集まるんだけど、場所があんまりなくて。こういうところがあるといいね」と話す女性6人組は「楽しかった。いっぱい笑った」と、来店時より一層明るい顔で帰っていった。

店内では、お客同士挨拶を交わす光景がよく見られる。「近所にいた知り合いが、震災で離ればなれになっちゃったんだけど、ここに来れば会えるの」と話すのは、カフェを運営している高



Z00 Café

代表 上沢りえさん

「まちの人がたくさん集まって交流できる場になってほしい」

校生の祖母。友人とお茶を楽しみながら、孫とその仲間たちを応援している。はじめは多少の不安もあったが、高校生が丁寧に、一生懸命にがんばっている姿に安心し、刺激を受けて、自分たちの暮らしにも張り合いが生まれるという。若い世代が元気に活動し、大人が見守るあたたかい様子はまるで大きな家族のようだ。

思いを込めて一生懸命に

カフェの場所は、「特定非営利活動法人こども福祉研究所」が運営する、「ゾンタハウス」という自習施設。ハウスは、被災した中高生の放課後の勉強スペース、居場所づくりを目的として11年9月に開設されたもので、いまカフェを運営している高校生たちは、中学生の頃から通っている。

高校生が、「さまざまに支援を受けた恩返しをした」「高校生ならではのことをやりたい」という思いをかたちにしたのがこのカフェ。ハウスのスタッフなど、大人の知恵と技術を借りながら切り盛りする。開店にこ



本格調理もまごころをこめて

ぎつけるまでも、看板づくりや食材の単価計算、メニューの考案のほか、保健所への申請書類について調べるなど、できる限りを高校生がしてきた。

第2の家ともいえるたいせつな居場所、ゾンタハウスの頭文字「Z」に、自分たちが0から始めたという思いで「00」を合わせて、Z00 Caféと名づけた。明るく個性的なメンバーが集う、動物園のようににぎやかな場所という意味ももつ。

平日の夕方など、自習の合間に打ち合わせをし、開店日、午前中の部活動後に駆けつけて準備を始めた

する。エントランスにテーブルを運んで席を設けたり、食材の用意や調理の下準備も整えておく。開店時刻を迎え、お客が入り始めたら、メニューの説明をして注文をとったり、調理、会計、片づけなどに奮闘する。

まちの未来に託す

17年2月には開店10回を超えた。お客の目の前でカフェラテの泡に絵を描くラテアートのできをほめてもらったり、ふだんかわる機会のない人と関係をもてたり、忙しく働いたりしながら、メンバーはたくさんの人によるこんでもらえることに楽しみとやりがいを感じている。アルバイトとは異なり、スタッフへの人件費が支払われることはないが、高校生が得られるものは多い。代表の上沢りえさんは、「山田町の人がたくさん集まって交流できる場になつてほしい」と語る。

交流を深めているのはお客ばかりではなく、スタッフとして活動している高校生も同様だ。同じ場所へ勉強をしに集まるメンバーであつ

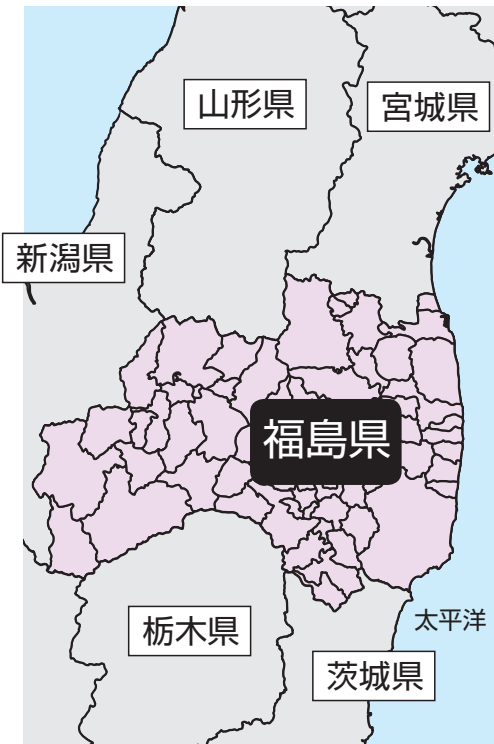
ても、以前は名前の呼び方にさえ少し気遣っていたという。話し合いを重ね、力を合わせ、苦楽をともにしてきたことでますます距離が縮まり、皆の息はぴったりだ。少なくとも、いまのメンバーが高校生のうちは活動を継続するが、1年後、高校を卒業すれば、将来の夢、思い思いの目標に向けてまちを離れるなど、メンバーの進路は分かれる。それまでに、まちの人たちがいつも開店を心待ちにしているカフェを学校の後輩などに引き継ぎたいと考えている。

支えてくれた人たちの思いに込めようとする純粋な気持ち、地域に活力を与え、まちを照らす。

DATA

Z00 Café

施設運営：特定非営利活動法人こども福祉研究所（山田支部）
〒028-1351
岩手県山田町長崎4-2-10
TEL / FAX 0193-77-3240
HP <http://www.kodomofukushi.com/>
★カフェの開店日はTwitterなどで事前に告知されます。



生産者を囲む高校生編集部（三澤由佳さんは左から3番目）

福島をいまを伝え、未来をつくる高校生編集部

◎ふくしま食べる通信（福島県）

ポイント

- 高校生が地元を再発見しながら主体的に学び、挑戦する場
- 先輩への憧れが原動力になり、活動が続いていく

各地域で活躍する生産者の姿や想いを伝える情報誌とともに、誌面で特集した生産者が手がける食材を付録として送付する『食べる通信』は、2013年の『東北食べる通信』の創刊以来、そのスタイルが全国に広まり、14年に「一般社団法人 日本食べる通信リーグ」が設立された。15年4月創刊の『高校生が伝えるふくしま食べる通信』も、同リーグに加盟し、発行している。

同誌の特色は企画、取材、原稿の作成など、情報誌発行に関する作業を高校生が行っている点だ。

1人の高校生の思いから

創刊のきっかけとなったのは、同誌の事務局である「一般社団法人・あすびと福島」が運営する高校生向けの社会起業塾「あすびと塾」だ。第1期生である安積高校2年（当時）の菅野智香さんが、東日本大震災にともなう福島第一原子力発電所の事故による放射性物質汚染の影響で、さまざまな風評にさらされる福島の信頼を回復させたいという想いを、14年8月に同

塾内でプレゼンテーションした。その想いをかたちにする手法として事務局が提案したのが『食べる通信』だ。

同塾の受講生3人とともに、同年9月に方針を決定し、翌15年1月に「一般社団法人 日本食べる通信リーグ」に正式に加盟。同年4月に創刊号を発行した。

各号で特集する生産者は、編集会議で決定する。地元のプロducerについて高校生自ら情報収集し、提案することもあるという。

また、誌面にも工夫をこらす。編集部員の一人として3号から5号に携わり、生産者が手がけた食材を使ったレシピを紹介するページを担当した、福島高校3年（17年3月時点）の三澤由佳さんは、「鮫川村の大豆農家さんを集めたときには、大豆に素朴なイメージがあったので、給食風の盛り付けにしてみました」と話す。

編集部員の個性が光る誌面は、生産者はもちろん、生産者ではない立場でその地域の食や流通、文化の発信などにかかわる人たちの想いや魅力も伝えている。

憧れの連鎖が未来をつくる

同誌では、これまで延べ15人の高校生が編集部として活動に参加してきた。

1人の高校生の想いから出発した同誌が、メンバーの代替わりをしながら続けてこられたのは、憧れの連鎖があったからだ」と事務局長の椎根里奈さんは言う。

「原発事故に対する感情から出発した活動ですが、時間が経つほど、気持ちを維持するのが難しい。安定したモチベーションになるのは、先輩に対する憧れだと思えます」

三澤さんも、初代編集長である菅野さんに憧れて、編集部に参加したという。また、三澤さんが学校で同誌での活動について発表を行ったところ、それを見た後輩が編集部に加わったこともあったそうだ。

編集部での活動は、部員たちの進路選択にも影響を与えている。三澤さんは自身の夢について、「自分が編集部で経験したように、福島の子どもたちが、主体的に挑戦できる場を

増やしてあげたい。『福島で勉強できて良かった』と言ってもらえるような、学びの場をつくることが目標」と、目を輝かせながら生きいきと話す。

4月からは関東圏の大学に進学するという三澤さんは、「編集部で活動して、やっぱり福島が好きだと思いました。4年間しっかり勉強し、経験を積んで、また福島に戻ってきたと思います」と、春からの新生活への希望に表情を綻ばせる。

情報誌の発行という活動にとどまらず、人材育成の場にもなっている同誌。かつての、そしてこれから高校生編集部員が、未来の福島を担い、支える存在になってくれることを期待してやまない。吉

DATA

ふくしま食べる通信

2015年4月に創刊し、17年1月発行号で創刊から8号を数えた。年4回発行。(各号2500円)17年冬号(17年1月発行)は約760部を発行。ホームページにて随時定期購読を受け付けている。
URL <http://taberu.me/koufuku/>

専門家に聞く地域づくりのヒント

地域づくりの担い手としての高校生
—その可能性を支えるために—



福岡大学 人文学部 教育・臨床心理学科 准教授

添田 祥史 (そえだ・よしふみ)さん

北海道教育大学准教授を経て、現職。専門は教育学、とくに社会教育、成人基礎教育。「おとなの学び」を切り口に、地域づくりや生活困窮者支援の実践研究に取り組んでいる。釧路自主夜間中学「くるかい」初代事務局長、釧路市生活保護自立支援プログラム第二次ワーキンググループ委員、生活協同組合グリーンコープ「子どもの居場所と学習支援」研究会のコーディネーター、NPO法人「抱樸」(旧北九州ホームレス支援機構)の調査研究事業への協力など、現場に学び、現場に還す研究を目指す。

●高校生のがんばる姿が地域を元気にする

部活や受験に追われて、高校生が地域と出会う機会はあまりありません。だけど、だからこそ、一度、両者が出会うとこんなにも豊かな活動が生まれることを2つの事例は教えてくれます。

まず、高校生ががんばっていること自体が地域を元気にし、おとなを勇気づけてくれることが印象的でした。「Z00 Café」で高校生ががんばる姿を見て、高齢者も刺激をもらい、張り合いが生まれています。『高校生が伝えるふくしま食べる通信』の記事は、読み手のおとなたちの地域を見る眼を変えてくれます。子どもでもあり、おとなでもある高校生という存在特有の訴求力や発信力があるのかもしれない。

●地域づくりをととした学びと成長

高校生が活動をととして学び、成長している事実もまた印象的でした。心身ともに子どもからおとなに近づいていく高校時代は、自分とは何者で、どう生きるのかを考え、かたちづくる時期です。このことは、私たちおとなの誰もが経験してきたことですが、現代社会において、それを行うことは難しくなっています。不確かな時代にあって、生き方のロールモデルが描きにくくなっているからです。

2つの事例からは、活動への参加をととして、高校生が成長していく姿が読み取れます。これからの時代を生きる若者には、自分づくりと地域づくりとの循環的な学びこそが大事だと言われています。事例では、高校生たちが活動への参加をととして、自己やアイデンティティを形成していました。自分たちの活動による働きかけで変わっていく地域や社会からの「はね返り」からも、彼らは多くの気づきや学びを得ることでしょう。

●高校生の学びと成長を支えるおとなの役割

自分たちには力がある。自分たちの意思で社会や未来は変えられる。そのことを高校生時代に体感できたことは、本当に幸せなことです。その経験が、彼らの人生を励まし、支えてくれるでしょう。

だけど、実際にはそこに至るまでの道筋が難しい。おとなが全部お膳立てをしてしまっただけでは、もちろんダメです。高校生には力があると信じる。その信念に基づきつつも、高校生だけではできないことをサポートする。高校生が主体性を発揮するためには、彼らを能動的な社会的主体として理解しながらかわり続けるおとなの存在が不可欠です。今回の2つの実践報告の行間からも、そうしたおとなの存在がにじみ出ています。そして、そうしたおとなと出会ったこと自体も高校生にとって大きな財産になります。

新しい土地になじむために、 まちを知り、人を知る活動を

福島県双葉町◎いわき・まごころ双葉会 事務局長 大橋 庸一さん



いわき市内の災害公営住宅「薄磯団地」と七夕飾りを共同制作し、平七夕まつりに出品した

東日本大震災にともなう福島第一原子力発電所の事故で、そのほとんどが帰還困難区域に指定されている福島県双葉町。いわき市に多くの町民が避難するが、仮設住宅とは違い、借り上げ住宅では支援や交流が乏しかった。自分たちでつながりを紡ぎ直し、いわき市になじんでいこうと活動する「いわき・まごころ双葉会」の事務局長、大橋 庸一さんに伺った。

借り上げ住宅入居者の自治会

2012年の12月に私を含めた4人で、いわき市の借り上げ住宅に住む双葉町民の自治会として、「いわき・まごころ双葉会」を立ちあげました。立ちあげ当初の加入世帯は38世帯でしたが、現在では136世帯になっています。

会の活動は年に1回、12月に行う総会のほか、年に数回、日帰りバスツアーを企画したり、いわき市民が入居する災害公営住宅「薄磯団地」との交流行事（本誌53号に関連記事）などを行っています。

私たちの会では、双葉町への帰属意識をたいせつにしながらいま住んでいるいわき市を知り、なじみたいという思いで活動しています。そのため、会で企画するバスツアーでは、年に1回、いわき市再発見をテーマにし、

自分たちが住むまちを知るための機会を設けています。

私たちの故郷はいつまでも双葉町ですが、加入世帯の約半数が自立再建をしたいま、いつまでも「被災者」でいいいいのか、という思いがあります。子や孫の世代が新しい土地になじんで暮らしていくためにも、被災者の会から卒業することが目標です。

私自身も震災以降、6回の引越しを経験しましたが、それぞれの土地でよい出会いがあり、たくさんの人に助けられました。だからこそ、いわき市の皆さんとも積極的に交流していきたいと思っています。

さまざまな困難がありますが、乗り越えて楽しく生活していきたい。現状を直視して、前に進みたいと思います。





DATA

いだてんきょうそう
新春韋駄天競走

日蓮宗仙寿院・釜石仏教会、
 釜石応援団あらまぎハート
 住所：岩手県釜石市只越町2-9-1
 電話：0193-22-1166
 メール
 info@kamaishi-ouendan.com

38回目

市民リレー

東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

震災と津波の記憶を 千年先の未来へ



岩手県
釜石市

いだてんきょうそう
 ◎新春韋駄天競走（岩手県釜石市）

ライター：元持幸子



ドラの合図で一斉に坂道を駆けあがる参加者



韋駄天競技の説明をしている下村達志さん



ゴールまで手を離さないように一緒に走る親子部門

2017年2月5日、釜石市の市街地に、137人の「新春韋駄天競走」参加者が集まった。ドラの音を合図に、東日本大震災で浸水した市街地を駆け抜け、高台の仙寿院までの286m、標高差約30mの坂道を一気に駆けのぼっていく。このコースは、津波襲来時に大勢の人たちが逃げた道だ。今年で開催4回目となる韋駄天競走は、「津波が来たときには高台へ逃げること」「震災の教訓を末永く継承していく」という思いから始まった。6つの部門に分かれて競技が行なわれ、年々参加者も増えている。3歳の子どもの走りにあわせ、手を離さず親子で坂道を登り切る姿や、一気に駆け上る小学生や中学生、体力に合わせながらしっかりとゴールを目指す参加者の様子が見られた。そのなかから今年の福男・福女が決まった。沿道には声援を送るたくさんの人たちが集まり、活気に包まれた。

定場所)にゴールすること」と、迅速な避難を意識づけるよう丁寧説明を行っている。下村さんは、「この韋駄天競走の目的が地域に根づくよう、継続していくことがたいせつ」と、さまざまな工夫を企画に組み込んでいく。たとえば、震災を長く後世に伝えるために、地域の祭り「節分追儺会」のなかの一つとして組み込んだ。真剣に走り抜ける様子や縁起を担ぐふるまい等は、兵庫県西宮神社の開門行事「福男選び」をヒントにした。津波の到達した街中をスタート地点とし、コースには地点ごとに5つの名前がつけられ、避難を意識してもらおう工夫をこらしている。「てんでん小路」は、「津波が来たら、各自でてんでんばらばらに高台へと逃げる」という教訓を示す、「津波でんでんこ」の言葉にちなんでつけられた。ゴール付近の「ぎづな坂」は、最後のきつい上り坂を、励まし合い手を取り合いながら登りきる様子より名づけられている。韋駄天競走の最後に、仙寿院の芝崎恵應住職は、「震災時には高台へ逃げる」と、震災の教訓を忘れないように声をかけ、参加者全員で海に向かい黙禱を捧げた。

DATA

牡鹿の学びを考える会

宮城県石巻市^{いせんぼ}鑄銭場5-26

伊東義塾内

TEL 090-2021-3618

URL <http://post6550.wixsite.com/oshikamanabiba>

39回目

市民リレー

東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

ワカメが子どもたちの可能性を広げる学びの場へ

◎牡鹿の学びを考える会(宮城県石巻市)

ライター：熊谷智美



地元のわかめで学びの場を

勉強の合間には元気なおしゃべりと笑い声

牡鹿半島からの日の出

ワカメ販売の収益で、子どもたちに学びの場を提供するプロジェクトがある。その名も「牡鹿に学びの場をつくるプロジェクト」。それに取り組み「牡鹿の学びを考える会」代表の伊東孝浩さんは、学習塾を運営し、講師として学習指導を行っている。東日本大震災が起こる前には、石巻市の牡鹿地域でも学習指導を行っていた。2011年秋、地元の家業を継ぎ親となっていた、かつての教え子から、「子どもの受験勉強をみてくれないか」との依頼があった。足を運んでみると、学習塾どころか、子どもたちが自由に交流したり遊んだりするスペースがないという現状に直面した。

はじめは、仮設住宅の集会所を会場に、ボランティアで学習指導を行った。この学びの場は、翌春の受験シーズン終了と同時に終わるはずだった。しかし、受験を終えた子どもたちの妹や弟も学びの場を必要としていた。

震災前には、石巻市中心部の学習塾まで送迎する保護者もいたという。しかし、復旧復興のために奔走する牡鹿の多くの人たち、従来の余裕はなくなっていた。

伊東さんは、自分ひとりでボランティアとして学習支援を行うことに限界を感じていた。一方で、牡鹿地域での「持続可能な学習の場」の必要性も痛感していた。

そこで、地域づくりの支援などを行っている、一般社団法人こはくの理事に相談し、石巻市内で子どもたちのサポートに関わっている団体などに呼びかけて、13年に同会を結成。牡鹿地域の中学校やPTAの協力なども得て、14年6月に学習の場をスタートさせた。

学習環境の整備とあわせて、子どもたちが無料で気軽に学べる場を維持するために、ワカメの販売を計画。水産業が盛んな牡鹿地域は、おいしいワカメの産地でもある。牡鹿産のワカメのおいしさを多くの人に知ってもらうことは、地域の産業をあと押しすることにもつながる。ワカメ販売の収益で学びの場を維持できれば、地域の産業が子どもたちを育てるという循環を生む。

現在、学びの場は大原地区の集会所で金・土・日曜のなかの2日間開催。中学1年生から高校2年生までの5〜6人が学んでいる。「今後は受験勉強だけでなく、地域の伝統、文化にふれる機会や、地域外の人との交流の場にもしていきたい」と伊東さんは語る。

今後、牡鹿で育つ子どもたちが減少しても、学ぶ環境が維持されるように、そしてその子どもたちが大人になつてから、「牡鹿で暮らしてよかった」と思えるように、プロジェクトの展開が期待される。

S-1グランプリ 第4回いがす大賞が 開催されました!

住民の支え合い活動を発表し合い、称え合う「S-1グランプリ 第4回いがす大賞」が、2017年2月26日(日)にせんだいメディアテークにて開催された(主催:同実行委員会)。被災3県を中心に全国から25団体の応募があり、予選を通過した11団体が、観客の前でプレゼンテーションを行った。会場には約250人の来場があり、人形劇の実演・ダンスの披露・竹灯籠の点灯・料理の振る舞いといった趣向を凝らした発表の数々に、ときに笑いが起こり、ときに応援の声が飛び交い、参加団体と来場者が一体となって盛り上がった。

審査委員は、東日本大震災の支援にかかわる先生方が務め、「大賞」・「準大賞」・被災3県以外での活動団体から選ばれる「活動提案賞」の各賞が発表された。さらに、今回新設された「特別賞」、会場から一番声援を受けた団体に贈られる「金の鈴賞」の表彰も行われた。

参加者からは「緊張したが、とても楽しかった」「他団体の活動を拝見し、勉強になったし、刺激を受けた」「賞をいただけ、今後の励みになった」といった声が寄せられた。

どの団体も、活動を続けてきた人たちの真摯な思いが伝わり、日頃の活動の様子が目に浮かぶような発表であった。「支え合い活動」の意義や楽しさ、工夫が、会場の熱気とともに伝わってきた。

東日本大震災・おらいの地域の元気興し

支え合い

S-1 グランプリ 第4回いがす大賞

地方創生・新しい総合事業 大見本市



参加団体の皆さんと審査委員で記念撮影

大賞	ちびぞうくらぶ (宮城県岩沼市)
準大賞	人形劇団あんど娘 (岩手県大槌町)
活動提案賞	トントントンカラリン隣り組活動隊 (香川県丸亀市)
特別賞	益城だいすきプロジェクト・きままに (熊本県益城町)
金の鈴賞	新おおつち漁協女性部 (岩手県大槌町)

おらほ賞◆TAKE1060プロジェクト実行委員会(宮城県丸森町)、サロン茶屋(福島県西会津町)

おもせ賞◆気仙沼はまらいんや会(宮城県仙台市)

のさる賞◆NPO法人総合型りくぜんたかた(岩手県陸前高田市)

おがる賞◆新町茶話会サロン(宮城県川崎町)、みんなの家@ふくしま(福島県福島市)

来場者の声

- ・手づくり感が温かく、優しい気持ちになりました。
- ・発表者の方々がとても生きいきとしていて、発表を楽しんでいるのが伝わってきました。
- ・いろいろな地域活動を知ることができました。活動をなさっている方の発表の場があるのは大事だと思いました。
- ・皆さんががんばっている姿を見ると、自分もがんばろうという気持ちになるので、この大会をずっと続けてほしいです。来年もまた来ます。



★
大賞
★

ちびぞうくらぶ

(宮城県岩沼市)

授賞理由

親子や障がいのある人たち、高齢者が、一緒に過ごす活動の楽しさが伝わってきました。その楽しさをたくさんの人に理解していただくために、さまざまな工夫をしていることもわかりました。今後ますます多くの笑顔が広がっていくことを期待します。



0〜3歳の子どもとママが月2回集って遊ぶ「ちびぞうくらぶ」は、乳幼児の親子の孤立化を防ぎ、同世代の交流を深めるサークルとして、2015年4月に発足。岩沼市内の集会所を拠点に、多彩な色で描けるマールクレヨンづくりや、クラリネットの演奏会など、家庭ではできない趣向を凝らした企画で約2時間を過ごす。兄弟で参加する子どもにとって、赤ちゃんを見守る高齢者ボランティアがいるため、上の子が安心してママを独り占めできる時間にもなっている。会場では、障がいのある人たちが栽培した野菜の直売も行われ、「安くておいしい」「しいだけが美味」と好評だ。

代表の三浦未穂さんは、保育士資格をもち、3児の母でもある。市が実施してきた遊び場が終了したことを受け、佐藤智美さん、猪狩あゆみさん、毛利ひろ子さんとともに、代わりとなる親子の居場所づくりを始めた。口コミで参加者が増え、いまでは平均30組の親子が参加する大所帯に。だんだんと、子どもの見守りをしてくれる高齢者や大学生が加わり、障がいのある人が一緒に過ごすなど、多様な人が交わる場に発展してきた。すべてを受け止めるような、「なんでもあり」の明るく混沌とした雰囲気の魅力だ。

「S11グランプリいがす大賞」では、親子と障がいのある人たち総勢15人がステージに上がり、流行のPAPの替え歌やリズム体操を披露して、多様な人と積極的に交流しながら仲間として育ち合う・認め合う・支え合う活動をアピール。見事「大賞」に輝いた。直後の活動日には、発表時の動画をみんなで觀賞し、副賞のいよかんを食べながら受賞を祝った。

4月からは第1・3火曜日の午前に、里の杜集会所などで活動する計画。入会金300円、参加費1回100円。単なる親子サークルに留まらない「ちびぞうくらぶ」の今後に、どうぞ期待！

小

被災者支援から、 日常の地域支援の担い手へ



宮城県被災者支援従事者 研修の6年間を振り返る



宮城県及び宮城県サポートセンター支援事務所では、仮設住宅やみなし仮設(借りあげ賃貸住宅)、災害公営住宅などの支援にあたっている従事者を対象に、「被災者支援従事者研修」を平成23年度から実施しています。今回はこの研修の6年間を振り返るべく、初期から研修を受講し、いまでも第一線で活躍するお二人の声をお届けします。

宮城県研修の特徴

宮城県研修の特徴は、①対象を限定せず、被災者支援に携わる誰もが無料で受講できる、②福祉の仕事経験のない人にもわかりやすい初任者用テキストを作成し、被災者に対する個別の生活支援とコミュニティを意識した地域支援の双方の視点を学ぶ、③一度きりの研修とせず、一定期間の実務を積んだ者を対象として、状況に応じた支援や、より実践的な課題対処能力を養うことを目的としたフォローアップや応用研修を用意し、重層的な研修体系にしていることだ。

研修を6年実施するなかで、初期から受講している支援従事者はスキルを磨き、福祉人材として地域で活躍する存在となっている。ここでは、今年2月2日に仙台市内で開催された「第1回宮城発これからの福祉を考える全国セミナー」(主催・宮城県地域支え合い・生活支援推進連絡会議)で発表をした、2人の支援従事者の話から、

宮城県研修の意義を深める。

受講者の活躍①



石巻市社会福祉協議会 地域福祉コーディネーター 小松沙織さん

石巻市で福祉の仕事に就いていた小松沙織さんは、東日本大震災で家や仕事を失った。6人家族が3人家族となり、みなし仮設に住むなか、石巻市社会福祉協議会の仮設住宅入居者等支援事業のエリア主任として雇用されることに。仮設住宅を訪問し、見守りコミュニティ支援活動をするのが仕事だったが、訪問する先で「死んだほうが良かった」「生きていく喜びなんて何もない」という話を聞くたびに、気持ちが重くなったという。一方で、被災者同士で苦しい思いも共感し合い、「ありがとう」と言い

合える関係が、お互いの心を癒していくことも実感した。そこで、「さみしい」という声があがればお茶会やサロンの開催と一緒に考え、「誰が住んでいるかわからない」という声には地域交流会を催すお手伝いをした。アルコール問題が起きたときには、地域で勉強会を開いて理解を深め、認知症の問題には「認知症家族の会」を立ちあげて当事者同士で話す場を設けた。また、閉じこもり気味の高齢者がいれば、毎朝のラジオ体操に誘った。それは、仮設住宅のなかで互いを気にかけて見守る、セーフティネットづくりの始まりでもあった。

仮設住宅で起こる生活課題を発見し、試行錯誤しながら解決策に結びつける毎日、実践あるのみで無我夢中。自分たちの支援の方法が正しいのかどうか、悩むことも多々あった。そんなとき、日頃の実践を講師に理論づけてもらえる宮城県被災者支援従事者研修の存在は大きく、受講後は自信をもって現場に帰ることができ

たという。一度に学びを詰め込まずに、被災者の生活にに応じて段階的にタイムリーに学べるプログラムは理解しやすかったと言う。また、自治体を超えて、同じ立場の支援員と情報交換ができることは、悩みを共有し分かち合えるセルフケアの場でもあった、と小松さんは振り返る。

現在は、生活支援コーディネーターを兼ねる地域福祉コーディネーターとして、復興公営住宅を含む地域主体の密着型の支え合い活動の活性化を住民とともに進めている。「地域のなかで生まれた住民同士の気づきや思いを、重ね合っていく時間や過程をたいせつにかかわっていきたい」と小松さんは話す。

受講者の活躍②

美容師だった芳賀裕子さんは東日本大震災で被災し、南三陸町社会福祉協議会が運営する「被災者生活支援センター」の生活支援員になった。



南三陸町社会福祉協議会 生活支援コーディネーター 芳賀裕子さん

南三陸町では、①「生活支援員」、②「有資格者の支援員・コミュニティソーシャルワーカー」、③「行政」の3層構造の支援体制を敷いており、生活支援員は住民を365日見守り、気づきを専門職につなげる役割を担っている。訪問先で「あなたの家は高台で残ったんでしょ。家がある人に私の気持ちにはわからない」と言われるなど、心が傷つき仕事を辞めたいと思ったこともある。でも、「待っていてくれる住民や、一緒に取り組み仲間の存在のおかげで続けてこられた。孤独死を出さないという目標に向かって、自分たちのまちは自分たちでつくることを意識してきた」と芳賀さんは話す。

具体的には、みんなで集める場や仲間づくりのきっかけをつくるお茶っこ会、生活リズムをつくり体を動かすラジオ体操と「ちょこつと運動」、みんなで認知症を理解するための「認知症サポーター養成講座」の開催、みなし仮設の人対象のサロン活動などをお手伝いしてきた。また、地区ごとに行政や専門職との情報交換会を月1回開き、地域に根ざした支援を目指した。

宮城県被災者支援従事者研修では座学だけでなく、初めて会う受講生同士で協力し合う必要のある演習が行われるため、受講生が仲良くなり、ほかの地域で上手くいった取り組みや失敗したことを、解決策などについて話し合うことができた。「自分たちのまちなだけを見ていては、気づけないことばかりだった」と話す芳賀さん。初任者としての基本的な知識を学ぶとともに、アルコールの課題をもつ人への接し方や関係機関との連携に悩んでいたときには、ちょうど研修でアルコール依存症の人への支援

が取り上げられ、学びを深めることができた。

住民との関係づくりには1年間半を費やしたというが、住民から「あんなたちがいてくれてよかった」と言ってもらえたときに、「この仕事をやっていてよかった」と思ったという。現在は、被災者支援の経験を活かし、生活支援コーディネーターとして活動中だ。

支え合い活動の推進役

宮城県被災者支援従事者研修では、事例検討やアセスメント方法などの学びの機会だけではなく、現場の実践を支持する講師の対応や受け止める場の設定がなされており、「支援従事者への支援」が行われているといえる。さらに、公設民営の宮城県サポートセンター支援事務所の存在は大きく、ネットワーク型の運営手法で多様な組織を横断してつなぐとともに、アドバイザーによるデリバリー型の支援によって、集合研修だけでは担えない現場でのスーパービジョンや組織マネジメントの向上をもサ

ポートしている。

宮城県の場合、当事者性をもつ被災住民から支援従事者を登用しており、住民の日常生活に必要な支援にとどまらず、生きがいや楽しみといった生活の豊かさを求める「意思決定」（自己決定）をも支援している。支援従事者は、不足する介護・福祉サービスの隙間を埋める役割（穴埋め）ではなく、福祉専門職のような福祉・介護サービスを通じた支援とは異なる役割を担っている。まさに「地域支え合いサポートセンター」（平時のサポートセンター）としての可能性をも体現している。

このような研修事業を被災地だけではなく、全国各地の住民を対象として実施することは、いま注目されている住民主体の支え合い活動の推進役を育成することや、災害が起ってから人材を育成するだけでなく、それを備えての人材育成にもつながる。そのためにも、研修事業の実施を支援する国や自治体の仕組みや制度をつくること

● Profile

ご近所福祉クリエイター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエイターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。

2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。

主な著書に、「見守り活動」から「見守られ活動」へ(CLC発行)、『生活支援コーディネーターと協議体』(共同執筆、CLC発行)。



広島土砂災害と個人情報

ご近所福祉クリエイション 主宰 酒井保
ご近所福祉クリエイター 酒井保

忘れちゃあいけんこと

「酒井さん、問うてみるんじやが(聞いてみたいのだが)の意、東北の震災で被害にあわれた皆さんは、どういうように地域で支え合っておられるんかね?」

過日、広島市安佐北区三入可部地区において、「地域支え合いづくり」をテーマにした研修会へ登壇させていただいた際に受けた質問である。2014年8月20日に、広島市北部を襲った局地的な豪雨による「広島土砂災害」の被災地域では74の方が亡くなり、ここ三入可部地区では、うち6の方が亡くなっている。

この質問に対して、宮城県、岩手県、福島県の各被災地を訪問し、見て、聞いて、感じたことを僕の言葉で説明し、行く先々では、広島土砂災害のことをすいぶんとご心配いただき、とてもうれしく思っていることを伝えた。

「東北からも、ようけボランティアアさんに来てもらうた。ほんまにうれしかったよのう」

「あのときは思い出しとやないが、忘れちゃあいけんことよのお。恐ろしかった。東北の皆さんもそうじやたらう」

「東北の皆さんもがんばっておられるんじやけえ、ワタシらあも頑張らにやあいけんね」

語られる一言一言に、皆がうなずいた。

土砂災害の経験から

「皆さん、いろいろと辛い思いをされたことでしようが、あの土砂災害以降、地域支え合い活動を考えていくうえで、特に気をつけておられることはありますか?」と問いかけてみた。

すると一人の女性が、「あの、私から一ついいですか?」と手をあげた。その女性は、被災地域で民生委員をしているということだった。

「私の地区では、日常の見守り活動に力を入れていきます。それぞれの家族構成や要介護の家族がいれば、その介護度や生活の状況などを誰が見てもわかるような台帳に記して、自主防災組織でそれを管理しています。家族の誰かに変化があれば、それを台帳に追記しています。災害が起きたとき、家が崩れたとしても要介護のお年寄りや障がい者が、どの部屋にいるかがわかるように、家の見取り図なども添付してもらっています」と話してくれた。

すると、一人の男性参加者が、その発言に反応した。

「ちよとごめん。そのことについて助言させてもろうてもええかい?そんなことをして、個人情報扱いはどうなるんかいね?」

個人情報保護法というものをよく知らんようじゃねえ。私の地区でも、台帳のようなものが必

要じやいう意見が出されたことがあったが、個人情報のあつかいが問題になってのお。じゃけえ、もちいと慎重になられたほうがええと思うがの」

こう言い放つた男性は、土砂災害の被害がなかった隣町からの参加者で自治会の役員をしているということだった。

「ご助言ありがとうございます」女性は、男性に向かって深々と頭を下げた。そして、下げた頭を静かに上げながら、「個人情報

のことは、十分承知しております。台帳には全世帯、全住民の情報が詰まっています。個々の情報が必要なんです!これは、命の問題なんです!...、死んだんですよ!」と穏やかな口調は次第に叫び声へと変わっていった。

「人が死んだんです!74人の尊い命が...。妊婦さんもいたんです!」叫び声は、嗚咽へと変わっていった。沈黙が続いた。

個人情報じゃないんです!

彼女は続けた、「お互いの暮らしぶりを知ろう!...地区の皆さんから出された意見です。個人情報?そんなことを言う人は誰一人いませんでした。それは、個人情報の問題を知らなかったからじゃありません。助け出してあげること、すぐに発見してあげることができなかった後悔

があつたからです。亡くなられた方々の顔を一人ひとり思い浮かべながら...、すまない、申し訳ないと思ひながら、これらの地域再生について、何をしたらいいか?どうしたらいいか?もうあんなつらい思いは嫌です!」と声を絞り出した。

再び沈黙が続いた。男性は、気まずそうに「いや...、なんか、すまんかった。余計なことを言うて」と頭を下げた。

「私こそ、ごめんなさい。あなたは、間違ったことを言っています。どうか気になさらないでください」と女性も頭を下げた。

そして、涙を拭いながら、「私たちが拵えた台帳にはね。あのかの後悔が詰まっているんです。個人情報じゃないんです。希望なんです」と笑顔をつくった。命の問題...、大事なことを学んだ。



イラスト / 坂板モツ to 穂栗堂

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

支援を受けて意思決定、 地域の支え合い①

震災から丸6年、被災地の想いが「風化」しつつある報道を観るにつけ、サポートセンターにかかる報道の欠落に無念さが残ります。

今年3月15日に、サポセンの活動を通じて、宮城方式の「地域福祉の推進」を考えるセミナーを開催しました（この原稿は開催前に書いたもので、セミナーの内容については後日報告します）。狙いは、サポセンに対する評価を市町、社協をはじめとする皆さんと共有することです。前向きな評価で共通理解！

サポートセンターで行ってきた「寄り添い型見守り支援」は、被災者の生活に寄り添う支援です。被災者の『思い』に傾聴・受容するなかで、生活にかかるよろず相談支援を行っていきます。必要な情報を本人に理解していただける形で提供し、本人の意思を形成し、支援につながる各領域に意思を表明できるよう支援します。そして、表明された意思を実現すべく、本人に伴走していくのです。

サポセンの人財は、住民からの登用ですから、当事者性・住民感覚がベースにあります。国が言っている『我が事』『丸ごと』を先取りした相談支援を実践してくれました。いまさら、国に『我が事』『丸ごと』と言われなくても、地域住民間の『支え合い』のエッセンスをサポセンは実績として築いてきました。

サポセンの支援者の立ち位置は、住民に寄り添うことで、『意思決定支援』を担う役割です。残念ながら、日本には『意思決定支援制度』はモデル的な動きが限定してあるだけですが、被災地の地域福祉の推進にあっては、意思決定支援制度を活かした仕組みとしての「地域支え合いセンター」と、そのためのサポセンが、被災地でのサポセンの発展型として展望できればと考えます。

次号では、あらゆる領域で対人援助の基本とも言える、意思決定支援について紙面で共有したいので、いつもより格調高く(?)お伝えします。

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上 章



地域で福祉の話し合い、 実践の場・組織につながる支援

前回は、地域で福祉について語り合える場の有無についてふれました。集団移転地や災害公営住宅、あるいは既存の地域においても高齢化や単身世帯の増加、一人親世帯や人間関係の希薄化などから孤立しがちな人のことが地域の福祉課題として増えています。

地域で、それも自治会や小学校区程度のエリアのなかで福祉について語り合える場、そしてできれば具体的にサロンの開催や見守り活動のできる実践をともなう場、組織があれば、より効果的です。こうした地域での福祉を推進する支援が、支援員さんやLSA（生活援助員）、社協職員、生活支援コーディネーターの役割の一つとして求められています。

地域で福祉について語り合える場、活動を実践することのできる場、組織を考える際に、一番身近で実現しやすいのは自治会のなかにならば“福祉部会”を設けることです。自治会長さんや役員さんと、こうしたことの相談と意思の提案、話し合いを丁寧にして、自治会組織としての合意を得て進めると良いと思います。

地域でなんらかの活動や組織を立ち上げる際にたいせつなことは、キーパーソンになる人たちとの十分な話し合いです。地域では、自治会の役員の高齢化、後継者不足などの悩みがあります。そうしたきびしい状況のなかで新しいことに取り組むには負担がとれない、なかなか住民合意が得られにくい、というのが現実です。事前の相談や話し合いにより、自治会の了解のうえで役員以外にも民生委員や関心のある有志の参加も得て、“地域の福祉についての勉強会”をもつのも有効です。こうした話し合いや勉強の場をとおして、地域の福祉が他人ごとではなく、自分のこと、地域みんなの問題として理解されてくれば、『何か地域でできることをしよう』となり、“福祉部会”につながります。その際、支援者に求められることは、地域の状況や住民の思い、意思を最大限に尊重して前を向いていく話し合い、学びの場になるように、寄り添った支援をしていくことです。

毎月1回中新町のコミュニティセンターで開催される新町茶話会サロン
「ふだんなかなか会えないからこうして集まるのが楽しい」

「みんなの顔を見て話すのが一番いいね」
そんな声が聞こえてくるふれあいをたいせつに和やかな雰囲気の中楽しんで時間を共有している



この日はいがす大賞本番に向けて練習 (P10 参照)



末永く幸多い人生に乾杯！

宮城県川崎町の中新町地区にあるコミュニティセンターで、毎月第3木曜日の10時から、「新町茶話会サロン」が行われている。お茶飲みや軽体操、脳トレといった活動をとおして、新町地区の住民たちがふれあっている。
料理のつくり方や近所で見かける猫のこと、病院にかかった時のことなど、話題は尽きない。「転んだけど、人に笑われる気がして、まず周りに誰かいないか見ちゃう」と明るく話せば、痛い失敗も笑い話に変わる。「転んでしまうとき

は、手の関節は伸びにくいから、なるべく肘をつくようにしたほうがいい」と心配して話すのは、サロン代表の佐藤孝子さんだ。町の生活支援コーディネーターであり、ふだん看護師としても働く佐藤さんは、サロン内でも健康の相談に乗り、インフルエンザ対策などの健康講話を行っている。
この地域には、日中ひとりで生活している高齢者が多く、そうした人たちの力になりたいたいと考えた佐藤さんとその友人で、同サロンを開設した。「皆さん人生経験が長くて、いろいろなることを引き出してくれませう」と、参加者が講師としてアクセサリーのつくり方などを教える側に回ることもあるという。
町内にある介護老人保健施設「アルパイン川崎」の利用者と職員もサロンの仲間に加わり、一緒に楽しんでいる。
川崎町の地域包括支援センターからも協力を得ていて心強い。「誰もが来られる場所にしたい」。そんな想いで活動は広がっていく。 **田**

☆次号予告 特集「見守り活動」

購読者を募集しています！

「月刊 地域支え合い情報」を年間購読しませんか？

購読会員 年3,696円 (年12回、送料込み)

購読ご希望の方は下記口座へお振り込みください。編集部にて確認次第、情報紙を発送いたします。

◎お振込先 ●ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：02260-9-46303
加入者名：全国コミュニティライフサポートセンター

※通信欄に、「地域支え合い情報紙 購読費」と記入したうえで、
①お届け先の住所 と ②何号からの購読申込み
を記入してください。



読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

53号の宮城県東松島市あおい地区の住民主体のまちづくりに驚きました。自立再建住宅の区画について安易な抽選を行わず住民同士の話合いで決定したことや、災害公営住宅と自立再建者のバランスを考えた自治会づくりなど、将来を見据えた丁寧な協議は今後の豊かなまちづくりにつながっていくと思いました。(仙台市太白区A・C)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください！
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joh@clc-japan.com

編集後記

P10～11に紹介記事が掲載された「S-1 グランプリ第4回いがす大賞」に、事務局として携わりました。ステージ袖で拝見していて、参加者の方の、緊張されながらも、発表の場を楽しもうという意気込みがとてよく伝わってきました。来場者の方にも、支え合い活動の醍醐味が届いたはず。次回も開催予定ですので、皆様奮ってご参加ください。(田中)